O. WILDE のデカダンス文学の宗教性について

——『ドリアン・グレイの肖像』から——

三　輪　春　樹
（跡見学園女子短大講師）

小説『ドリアン・グレイの肖像』は，画家バジル・ホールワードのアトリエから始まる。その冒頭の情景描写は，前置きにしては長く，冗舌である。情景描写の直後に語られる，若者の肖像画，もちろんこの若者とは主人公ドリアンのことであるが，この肖像画に描かれている若者の美しさの印象を弱めてしまうのではないかと危惧するほどだ。

肖像画は，主人公の分身であり，見方によっては肖像画が主人公であり，ドリアンが分身であるとも言えるほど重要な存在だ。その怪しいまでの美しさを読者に印象づけようとするなら，長い情景描写としての前置きは，むしろ避けられるべきであろう。にもかかわらず長い情景描写がおかれているということは，そこには，重要ななにものかが隠されていると考えることができるのではないだろうか。

ワイルドの文学の特徴である視覚性ということに鑑み，その情景描写を図像学的に分析することによって，その何ものかに迫ることが可能なのではないかと，私は考える。

「アトリエはバラ（roses）の濃い香りであふれ，夏の微風が庭の木立ちの間をそよぐと明け放たれたドアーからリラの（lilac）重い匂いが，また桃色の花をつけたサンザシ（thorn）のよりほのかな芳香が流れ込んだ。」

この冒頭のセンテンスの中に描写される三種の植物は，図像学的に意味を持たされている。

バラは，紅バラ（roses）が殉教を，白バラが純潔を表わし，色の特定されないバラとしては，天上の至福を意味する。

リラ（lilac）は，若さ，初恋，青春，純血，純粋，等を意味し，また香りの高い花として葬式に用いられるところから，死者への哀悼の意味も持つ。

サンザシ（thorn）は，茨のことであり，キリスト受難の象徴として余りにも有名だ。しかも茨の冠は，ローマ皇帝のバラの冠のパロディーなのだ。また，肉の誘惑，空しいもの等の意味も表す。

これだけを見ても，物語全体の伏線となっていることは明らかだが，同時に宗教的なモチーフが隠されていることが分かるだろう。

しかもこれらの植物は，香りとして表現されている。匂いは私たちの脳の古皮質に働きかける。隠されたものが，記憶の深層に働きかけてくると思わせるようなこの表現は，なかなか意味深い。物語をこのように読み進めていくと，驚くほど多くの宗教的なモチーフが現れてくるのだ。

そして，キリストの受難，キリストによる救済の物語との類似も読み取ることができる。ただしここで注意すべきは，物語の結末だ。キリストは，その身を捧げることによって，人類を救済し，永遠の生命を実現したが，ドリアンはその身を犠牲にして，美を救済し，永遠の美を実現したのだ。ワイルドの，美への信仰告白と言うこともできるだろう。

キリストは，当時のユダヤ社会にあって反社会的と弾劾されたが，神の真理を説いた。デカダンス文学も反社会的と倣されたが，美の心理を説いた，といっては言い過ぎであろうか。

The Importance of Being Earnest における喜劇化のプロセス

広　川　　治
（駒沢大学講師）

劇作家 Wilde は，*The Importance of Being Earnest* で登場人物をどのように意識的に人工的な嘘の喜劇的世界に導いているのだろうか。注目してみたいのは，Jack と Algernon の喜劇的対照という点である。Algernon は前3作のダンディの性質を受け継ぎ，次々と Jack 相手にウイットに富んだセリフを披露していくが，対する Jack は，ウィットをもって充分な反撃に出ることは少なく，特に第1幕では，“Oh, that is nonsense.” を繰り返すのみで，徹底して周囲の人物や状況に翻弄されているのである。

Algernon が仕掛ける側の trickstar のタイプに近いとすれば，Jack は騙し，からかいの対象（comic butt）のタイプに属すると言えるだろう。日本の狂言でいえば，その上下関係は別として，大名ものでの太郎冠者が Algernon で，大名が Jack に例えられるほど，二人のコントラストは第1幕において明確である。例えを現代の劇から挙げるなら，喜劇的対照という点では，Neil Simon の *The Odd Couple*（『おかしな二人』）に近い。主人公の二人の男がデートするイギリス人姉妹の名が Gwendolen と Cecily になっているこの喜劇でも，性格が正反対の二人の主人公のコントラストが喜劇的効果の中心にあ